

周作人・安藤更生往来書簡 (3)

徳 泉 さ ち

はじめに

安藤更生(1900～1970)は、會津八一の後を継ぎ早稲田大学文学部にて長らく東洋美術史を講じた人物である。彼は本学で教鞭を執る以前、1938年から1945年まで日中合弁の出版社、新民印書館に勤め、北京に居住した。その折に出会った周作人の学識や人柄に深く私淑し、師と仰ぐ人物は、ただ會津八一と周作人のみと後に語っている。安藤は終戦とともに北京を引き上げ帰国するが、その後も文通により二人の交流は続いた。本紀要では18号、19号とつづけて周作人と安藤更生の往来書簡の翻字を掲載し、二人の交流を追って来た^(註1)。全80通のうち、今号では1963年から1965年に書かれた27通の書簡を取り上げる。

なお、2017年7月、北京の中国現代文学研究叢刊編集部発行『中国現代文学研究叢刊』(第7期)誌上に周吉宜整理・陳力衛等訳「安藤更生与周作人往復書信」^(註2)が発表され、往来書簡全通が公表された(安藤書簡は日文から中文に翻訳)。両氏による精確な論考が刊行された今、筆者が改めて稿をなすことは屋上屋を架すようで躊躇されるものの、本稿では館蔵資料紹介のために安藤書簡を原文(日文)のまま掲載し、記録しておきたい。

また、2018年7月には「周作人国際学術シンポジウム」が早稲田大学にて開催され、国内外の多数の研究者が参集し大盛況のうちに幕を閉じた。本稿が今後の周作人研究に些かなりとも貢献できれば望外の喜びである。

周作人書簡の翻字、及び入力作業については、主として下記の二名の尽力により完遂された。(いずれも所属は2011年当時のもの)。

久保佐知恵(早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程)

古侯諒(早稲田大学大学院文学研究科修士課程)

また、書簡の掲載をお許し下さった安藤更生、周作人ご遺族の皆さまにも重ね重ね感謝申し上げます。さらに、周作人研究者である本学商学学術院教授小川利康先生には、書簡翻字の校閲や助言など一方ならぬ御協力とご指導を頂いた。今号にて全通の翻字が完了するが、ここに至り得たのは小川先生のご助力あつてのことである。心よりお礼を申し上げます。

2018年2月に安藤更生氏のご長女、安藤夏野氏が急逝された。この書簡翻字を熱心に読んでくださり、ご尊父の墓前に拙稿を供えた由を毎度伝えてくださった。それが筆者にとって何よりの励みであった。その暖かいお心に改めてお礼申し上げるとともにご冥福をお祈りする。往来書簡の完成をお目に掛けられなかったことが心底悔やまれる。

凡例

- 配列は年代順とし、冒頭に通し番号(No. *)を付した。

- 書簡の日時は、書簡文中に記されたものによった。また、消印が判読できず年号が不明の書簡については内容から年号を推定し配列した。
- 活字化にあたり、表記は極力原文のままとしたが、句読点やカギ括弧、書名の前後への二重カギ括弧などを必要最低限追加した。紙幅の都合上、原文にみられる改行や割注などのレイアウトは再現していない。
- 文字が判読不可能な箇所については、「□」と表記した。
- 明らかな誤記も原文どおりに翻字した。
- 書籍の書誌情報や、原文の理解のための補足情報については別途注記した。

No.53 安藤→周 1963年7月2日

「某甲」につき御教示を賜りありがたう御座りました。おかげ様にて多年の疑問氷解いたしました。東京は長雨で困りましたが今度は酷熱。今年は麦も稲もいけないやうです。今月五日から自動車で東海道を走破します。いま「膝栗毛」や「道の幸」を読み直し中。私は東海道を通った事がないので楽しみにしてゐます。ちかごろ書物の御注文がありませんがどうか御遠慮なくお申しつけ下さい。庭上の香椿は一丈に達せんとし太平花裡柳も元気になりました。四川省で発見されたといふ前世紀の植物 METASEQUATA GLYPTOSTROBOIDES を持ってきてくれた人あり。これは一九四二年にみつけたのださうですが少し元気がありません。

私はまだ中国政府からの日程が来ませんのでハッキリした事はわかりませんが九月の末に東京を出発。十月の国慶節に参列させられ十月十五日揚州での鑑真記念堂の歛入れに出席するやうになると思ひます^(註3)。何か日本から持って伺ふものがありましたら御用命ください。著しく大きなものでない限り何でも持って行きます。

七月二日 安藤更生

周先生

No.54 安藤→周 1963年7月25日

酷暑の候御起居如何であらせられますか。私は毎日裸で雑文を書いてをります。先日は某甲について御垂示を賜りましたがもう一つ御伺ひ致したい儀があります。それは東征傳中にあります淡海三船の五言律ですが

摩騰遊横闕 僧會入吳客

豈若真和上 含章渡海東

「禪林或網密」 慧苑覺華豐

欲識玄律路 緇門得妙工

のうち第五句の「網」は寫本によっては「綱」にしてあります。どちらが作詩上妥当であるか迷ってをります。網ならば戒網密と仄三連になってしまうし「綱」ですと平平仄平仄で孤平の難を免れないやうに思ひますがいかがで御座るませうか。高教を仰ぐ次第で御座ります。

魏廣州君の注文^(註4) 承知いたしました。ただし京都の人文の漢籍目録は今日では少々入手難になりましたので時間がかかるかも知れません。敗戦後には皆がああ紙で烟草を巻いて喫んでゐましたことを想起します。私は辛うじて一本を蔵してをります。今二十四日に日中文化交流会の事務員が北京から帰って来ますので私の訪燕の日程もその結果で定まります。庭前の紫陽花も三四輪を残すのみとなり涙香のみ徒らに咲き更ってゆきます。はやく秋が来て尊師にお目にかかる日が近づくことを願ってをります。

七月二十五日 安藤更生

周作人先生侍曹

No.55 周→安藤 1963年7月27日

拜啓、二日手書已拜讀矣。台駕須於九月末成行、甚善甚善、想鑒真紀念不至再展遲耳。聞今年又將紀念曹雪芹、文化界可云多忙了。先生來時乞爲帶來一件物事、小兒豐一欲得一ライター、但不用西洋貨、只須日本所製、形式較爲スマート、却亦不太新式、最好仍用ガソリン的、因恐有些資料在中國不可得也。如能作爲自己用的帶來最好、否則凡贈送別人之物均須交由稅關經過、納稅若干由收件人到那里領取、就是食品之類也均照此辦理。ライター只須極平常的、切不可太好、因爲說不定要經過稅關、便不知道要怎麼樣規定稅額也。如進口時能夠免稅、作爲自用的通過、以後便無問題了。如承見訪、可一直往裡面走、裡院的西邊便是鄙廬、或者到京以後祈一通知、可以叫豐一前往接洽。北京情形較之十年以前、大有改變了。北京目下正在盛暑中、但因每天有雨、所以反而不熱。艸々不盡。

安藤更生先生座右 周作人啓「啞人作通事」(朱文方印)

七月廿七日

下記書籍乞費神代購

- 一、今村信雄 落語の世界 青蛙房^(註5)
- 一、安藤鶴夫 落語國紳士録 同上^(註6)
- 一、現代教養文庫 街道今昔 上、下^(註7)
- 一、角川写真文庫 東海道五十三次 下^(註8)

No.56 周→安藤 1963年8月10日

拜啓 得廿五日手書、敬悉一一。承下問淡海三船詩句、以鄙見度之、必是“戒網”無疑。因鑒真故是律宗學者、且亦有梵網之典故、若云戒網則不成文理、且亦無所謂密也、寫本當是筆誤耳。來華日程已定否、願得聞了。北京近日甚苦雨、八月晝夜不停、以致院內幾成澤國、舍下幸在裏院、地勢尚高故無浸水之慮、若外院住人大有爲魚之慮、旧日東向客室現由別人住着、則室內水深數寸、爲居此以來四十多年所未曾有。今日已稍開霽、微有日光矣。此後大約可以暫安、但在秋雨時間、總還不能安心、因屋漏可畏有甚於虎狼、正如民話中所說。鄙人近來身體尚好、唯歲月逼人、老邁日增所不能免耳。現在正在翻譯希臘ルキアノス文集、才成三分之一、不知能否完成了也。匆々不盡。

八月十日 周作人「周作」(朱文方印)

安藤更生先生座右

No.57 周→安藤 1963年8月17日

拜啓、日前方寄一函、茲有小事奉煩。小兒豐一年已五十却仍喜釣魚、知尊駕將來北京、擬請爲帶一枝釣竿來、未知可以否？釣竿只須極普通的、因爲否則關稅便成爲問題、且許可進口与否亦問題也。紀念鑒真的事新聞上尚未有消息、不知定於何時舉行、尊處想已有聯絡矣。目下北京正在雨季、待至下月幾庶可以已經過去了。匆々不盡。

更生先生座右

作人 八月十七日「知」「堂」「賤」(朱文方印)

No.58 安藤→周 1963年9月11日

御下命の件承知いたしました。私は本月廿七八日ごろに東京を出発、空路訪燕いたします。ライターは私が友人から貰った使用中のを持って伺ひます。北京滞留十月五日位迄何事も思ふに任せず日本人は若老ともに官僚的にて膽力なく徒らに鼻息をうかがふに汲々たり。不堪慨嘆。目下抗争中。拜謁の日を待ち望み候。訪中代表團は文人と坊主にて小生は文人の方を引き受けましたが坊主の方は別にして貰ひました。満庭虫声秋闌なるを告げ南窓の樹影揺

落近からむとしてゐます。

「詩膽大於天」(朱文長方印) 室町時代銅印家藏

「百濟寺印」(朱文方印) コレハ贗物なり

九月十一日夜 安藤更生

苦雨齋御主人様

No,59 周→安藤 1963年10月21日

拜啓 於報紙上見揚州鑒真記念会已經開了、故想必已就歸國之途矣。承遠路帶來釣竿以及ライター見贈、十分感謝。所照相未知如何? 匆匆會見、不及詳談、殊爲悵然、即如關於先生家庭情形、魏廣洲君屢以見詢、輒無以代答、お嬢さん是否已進大学、共有お兒さん幾人之類、故希望便中示及是幸。八月初曾寄一航空信、似未得達、其中有幾冊書籍請爲代購、茲特再行抄呈、祈賜察閱爲荷。又外孫楊吉明已畢業獸医、但仍熱心於郵便切手、日前來信因爲缺少一九五五(乙未)年及一九六一(辛丑)年的兩種新年郵票、又切手紀念週的亦缺少去年(一九六二)的、請求設法補充、特爲轉達、瑣碎的事情十分費心。六朝錢文拓本信封製了已有三十多年、因中國仍有忌諱、難得遇見明達的人使用上一回、若在日本便沒有什麼願忌了。北京近已入冬、雖然還是陰曆的九月、若是老弱的人如鄙人者均已穿上之厚棉衣了。匆々不盡。

安藤更生先生 周作人「啞人作通事」(白文方印)

十月廿一日

今村信雄 落語の世界 青蛙房

安藤鶴夫著 落語國紳士録 同上

現代教養文庫 街道今昔 上下

角川写真文庫 東海道五十三次 下

No,60 周→安藤 1964年1月1日

甲辰元旦 賀正

東京都世田谷区岡本町五九七 安藤更生

No,61 周→安藤 1964年1月24日

拜啓 御歸國後未得來信爲念。十月下旬曾寄一信、亦未得來示、似近時信函常有失落情事也。特此專候起居、得暇祈賜一覆、不勝幸甚。匆々不盡、此上

安藤更生先生台鑒 作人 一月二十四日「知堂八十歳已後作」(白文重郭方印)

No,62 安藤→周 1964年2月15日

先日は久方ぶりに參館。ご無事の態を拝まして嬉しうござゐました。監視つきでは思ふやうなお話も伺えず私も申しあげられませんでした。がそれでもあの人達は大変骨を折ってくれましたので感謝してをります。私はあれから西安へ参りもう一度北京へ引返し、南京、揚州上海杭州広州を経て二十五に帰国いたしました。早速お便りをお思ひにいたしましたのにふとした事から家人が重傷を負ひ長い病院生活を送ってをりましたので諸事不手廻りにて家の中はテンヤワンヤといふ有様。そのためならずも御無沙汰いたし失礼の□平にお許し願上ます。幸ひ今月からは家も

やや平常に復しましたので別便にて御下命の書物並に魏廣州君への人文科學藏書目録お送りいたしました。目録の後の方は未だ刊行されてをりません。怪我人はやっと家の中を歩けるやうになりましたのでご放念下さい。私の家は郊外で大学へは一時間半もかかり乗物は四回乗換へといふ僻地にて女中も居らず。家族に病人でも出ますとめちやくちゃです。弊邦は梁上君子にも心せねばならずなかなか世外に穏々とするを許してくれません。大安といふ中国書を扱ふ本屋の雑誌から随筆を頼まれましたので別紙のやうなものを書きました^(註9)。失礼に涉るところ御容謝下さい。魏君宛手紙同封しました。恐縮ですが大意を中国語で話してあげて戴きたく存じます。

二月十五日 安藤更生

周先生 硯北

No,63 周→安藤 1964年3月9日

拜啓、十五日手書於月末拝讀、已有十日、尚未奉覆爲歉。前因久無音信、故致函奉詢、或恐中途有遺失、今乃知有家人負傷、然則豈是尊夫人、負傷或因交通事故乎？現已得康復、至可慶幸。本擬俟收到書籍後再写回信、但印刷物乃由船便、比航信需要加倍の時日、故今先發信奉候起居。魏君亦擬俟書到再行通知、想他聽到時亦必定驚託繼以慶幸歟？尊文過見推重、至以師見稱、尤感惶恐、見所登照片似尚佳、希以一二種見惠、至感。匆々不盡。此上。

安藤更生先生 周作人啓 三月九日

「知堂八十後所作」（朱文長方印）友人贈印之一、姑漫印於此

No,64 安藤→周 1964年3月17日

お手紙ありがたく拝誦いたしました。東京も梅は散りつばきも素枯れましたが春の進んであることを感じます。オリムピックの準備とやらで道路を泥縄しきに整備していたる所を掘返してみます。荆妻おかげ様で家の中の用事少しは出来るやうになりました。末の娘ワセダの西洋史に入学。目下フランス語を一生懸命やっています。先生のお寫眞焼付けまだ宮川君から貰っていませんので出来次第お送りします。カラー寫眞は失敗だった様子です。先日の私の随筆は「大安」といふ中国書籍取次店の宣傳雑誌に載せたものです。假名使ひなどを勝手に直したところがあり大憤慨です。切手少々同封いたしました。御令孫へお上げ下さい。

三月十七日 安藤更生

周先生 硯北

No,65 周→安藤 1964年3月23日^(註10)

拜啓、前得手書即寄一信、想已蒙察覽矣。第二天即收到賜寄書目、『落語國紳士録』及『街道今昔』、費神至爲感謝。当即寫信致魏君、來取書目、乃以開會多忙、隔了幾日始行取去、又以一箋囑爲轉寄、茲特附呈、祈察入爲荷。

『落語國紳士録』甚有趣味、以昔日居東京之影響、對於落語甚爲愛好、得讀此書殊有舊夢重溫之感、繙讀既竟特此到謝。匆々不盡。

安藤更生先生 周作人「周作人」（朱文長方印）

三月廿三日

No,66 周→安藤 1964年8月9日

拜啓 「壽則多辱」（朱文方印）

久未奉候、惟起居安適爲祝。友人鄭子瑜^(註11)君久居南洋、雖未曾識面、而文通已久、知係一誠實的學者、初到東

京諸多未語、幸祈公餘了暇、多加指引、則感同身受矣。想學問必多忙、乃以私事奉煩、負疚實深、幸祈鑒原。北京今年不很熱、因正在雨季也、東京近來如何？忽々不盡。此上
安藤先生 八月九日 周作人「周作人八十所書」(朱文長方印)

No,67 周→安藤 1964年10月25日

拜啓「壽則多辱」(朱文方印)

近未得來信、想見公忙、惟起居安適爲祝。見到魏廣洲君、託問先生一件事、因爲他很想送先生一部書、(但以解放後所刊爲限、因木版書極不易郵寄)但須是於先生有用的、所以請回答一下、以便轉告、是所至幸。鄙人仍在稿翻譯、且古典亦不時行、無可以奉告者。忽々不盡。此上

安藤先生台鑒 周作人「周作人八十所書」(朱文方印) 十月廿五日

No,68 安藤→周 1964年11月7日

ご無沙汰いたしまして御心配をかけました。私は元気です。但し先週は血壓が二百になり医者から三週間の絶対安静を命ぜられ苦笑してゐます。目下は最高百五十、最低八十いくつかで学校へ出てゐます。御放念下さい。鄭子愈君先生を主題にした論文で學位をほしいと云って□ました。実藤恵秀君の紹介で三四回會ひました。いい人のやうなので御希望に沿ひたひと考へてゐますが文学部にはわたし共の反対派もあり帰趨はわかりません。松枝君^(註12)がワセダの講師をしてゐますので同君とも相談して善處します。

魏廣洲君の好意感謝に堪えません。私は中国に魏君のやうな友人のある事を誇りとします。只今のところ特に魏君に願ひする書物はありませんが頼めばいつでも送ってくれると思ふと心強いです。それよりも魏君の地址を知りたいと思ひます。差支へなければ一々先生を煩はさずに直接中文で文通します。魏君も遠慮なく注文をよこしてくれるやうに先生からお申しつけ下さい。オリムピック記念切手お送りしました。一部は同封、一部は別送。御令孫に差上げていただきます。東京の秋も深まりました。私は陸心源の蔵書の納まってゐる静嘉堂文庫^(註13)の隣りに住んでをりますがその静嘉堂の森も色づきました。什刹海の柳も散つてゐることとせう。御身御大切に願ひ上げます。

十一月七日 安藤更生

葉堂先生 硯北

No,69 1965年 月日不明^(註14)

一、須田栄著戦後風俗小咄千夜一夜青蛙房出版定價四五〇^(註15)

書籍一種、特再奉請爲一注文見寄爲幸。

No,70 1965年1月2日

拜啓 倏忽又是一年了、想必新年多慶、至以爲賀。頃見到魏廣洲君、特囑轉告先生、如有賜教可由鄙處轉無悞、請勿寄至寓所、因其處住者均是同事、如知与國外友人通信、於現在機關的職員身份頗不相宜也。鄭君在東京承蒙照拂、甚感、現当已四新加坡去、來信告知因馬來正在盛倡反共、無法著作、凡有稿件出入均須檢查甚爲嚴厲、因此歸去後恐更不能著筆、關於此項情形、恐先生与松枝君未能知悉、故囑代爲說明、此爲關於鄙人思想不加深入之原因。其實鄙人的思想十分古舊、萬說不上什麼赤化、唯如此亦甚好、因爲鄙人對於拙作爲研究題目、本来不大贊成、因爲熟知自己的思想文字十分古舊、不值得那麼鑽研、如爲得博士計則不如改用時髦作者、更是事半功倍也。前兩年曾

有一英國人欲作此工作、來乞材料、唯因本無此等材料可給、現在北京舊年版書藏於找不到、故終未覆信也。匆々不盡、此請

安藤更生先生 周作人「周作人八十所書」(朱文長方印)

一九六五年一月二日

No,71 安藤→周 1965年1月9日

新年おめでたう御座ります。益々御健勝御慶び申上ます。鄭子瑜氏の論文は松枝君にも読んでもらひ、いろいろ相談いたしましたがよく材料を蒐集してはありますが中心となる独創的な見解が弱いのもう一度書き直してもらった方がいいといふことになり正式な會議にかけない事にしました。これは体裁のいい事を云って婉曲に断ったのではなく衷心からさう考へるから申したのですが鄭氏に真意がわかって貰えたかどうか心懸かりです。私は秋以来病気がちで思ふやうには鄭氏にも実藤氏にも面談できないので残念に思つてゐます。高血圧の患者といふものは外見割合ひに元気に見へるので二百を越した血圧で人と會見するのは決死的なものだといふ事は実藤君にもわかつてゐないやうです。今年はまだ一度中国へ行けそうですが健康の都合では何ともわかりません。今度行ったら魏廣洲君には是非會ひたいと思つてをります。「図書新聞」の切抜き^(註16)を同封しました。

一月九日 安藤更生

周先生函丈

No,72 周→安藤 1965年2月6日

拜啓 前得九日手書、知近患血壓偏高、目下未知稍好否? 諸希珍攝、東京有各種良藥、治療当甚易也。鄭子瑜君多承照拂、至爲感荷、近來想已回新加坡去了、据说馬來亞政府甚爲反動、籍口反共、對於進出口的文書稿件悉加檢查、因此回去以後、論文擬不再補充、因不便寫作、其實私意對於他提出論文的計劃原不贊成、即此中止、也是很好的事。但對於鄭君却不便說耳。此上

安藤更生先生 二月六日 周作人「壽則多辱」(朱文方印)

No,73 周→安藤 1965年4月30日

拜啓、好久不曾通信、未知近來起居如何、前聞血壓稍有增高、現在想已平定照常了。日前魏君枉顧、以書兩冊一爲葉恭綽之『歷代藏經考畧』^(註17)一爲朱謙之之『老子考釋』^(註18)、囑爲轉寄、或無甚用處、但魏君意甚誠懇、因爲照寄、已於廿六日寄出、因係普通郵便或者到當稍遲、特此奉聞。北京今春氣候不佳、雖已入初夏、但天氣尚冷、昨今早晨不及攝氏十度、老人畏寒、以是尚時々須生炉火、想東京當正值櫻花滿開的時候了。匆々不盡。

安藤先生 四月三十日 周作人「周作人所書」(朱文長方印)

No,74 安藤→周 1965年5月25日

貴冊並に『老子考釋』『歷代藏經考畧』ありがたく拝受いたしました。ご無沙汰を致しまして御心配をおかけしました。小生血壓大した変化なく其後良くも悪くもなりません。静養すればいいのですがその閑もありません。今秋は北京へ伺ひたいと思つてゐますがあなた任せの事ですからどうなるかわかりません。只今羅福頤氏の印章概述を遊び半分に譯してゐます^(註19)。暑くなるまでにはお目につけられさうです。御教示を仰ぎたいのですが中国の商家で使ふ「水印」といふものはどんなものでせうか。やはり押擦に普通の「印色」を使ふのでせうか。御重教を賜れば幸甚です。御地氣候不順の由、御健康に御留意願います。日本も極めて不順□□暑いかと思ふと急に寒く

なったり此分では今年も凶作だらうと云はれてゐます。寒斎の香椿もすっかり青葉になり毎朝の拌豆腐の楽しみもなくなりました。別封普通小包にて『東方文化研究所漢籍目録』の下をお送りしました。お□での節、魏広洲君に御手交願ひ上げます。私は老子については知るところ極めて少いのでこれから毎日翻読いたします。先日早稲田大学の教務部長古川晴風君^(註20)が人から貰ったと云って先生の詩の小幅を持って来て装演師に頼んでくれと云って来ましたので表具させましたところ大変よく仕上がりました。多分鄭子愈君が贈ったものだろうと思ひます。私にもあのやうな御筆を賜ることが出来たら光榮です。羨ましくなりました。先日御返事まで

五月廿五日

周作人先生函丈

コノ印前のは王介籛^(註21)君後のは来楚生君^(註22)後のは感心しません。最後のは十年ほど前の拙作。

No,75 周→安藤 1965年6月6日

拜啓 得廿五日手書、知起居妥善爲慰。寄下書籍当轉交魏君不誤、承詢“水印”實際即是商舖印章、不過用於負責担保的時候、至於印色原是普通的紅色（印泥）也。鄭子瑜君曾囑寫字數紙、只署單款、云係贈人之用、來書所說想即是其一、却已忘記寫的是什麼了。如有尊需即當寫奉、唯解放後已有十多年不曾作詩、僅於去年春間作有“八十自嘲詩”一首^(註23)、內容是純粹打油詩、但有鑒於過去三十年前、因爲“五十自壽詩”而引起文人們的圍攻、因此決定不在國內發表、當寫呈尊覽、日內寄奉。北京天氣已頗熱了。只是很少下雨、待到七八月中則又是淫雨、令人不堪、但幸而沒有什麼颶風耳。

六月六日 周作人「壽則多辱」（朱文長方印）

安藤更生先生

〈別紙1〉

再頃已寫得一紙、又找出前爲鄭君寫時餘下一紙、係單款者、所寫係廿餘年旧作、今亦一併寄上、請賜查収、但係是「船便」、恐須遲到也。

六、六 作人再發

No,76 周→安藤 1965年6月7日

詩中略有難解之處、稍作說明。日本怪物有山父、一目獨足、能知人意、老狸能幻化屋宇、廣容八疊、色極青新、此皆怪談中所常見。所云對話係指最近譯成之 Roukianos 的著作、中多諷刺詼諧之詞、出語不端謹、古時稱撒閨菱、因俗信播種胡菱、須口出穢語、種始繁衍云。

No,77 周→安藤 1965年7月6日 周作人のポートレート写真同封

拜啓 一个月前接到手書、已寄呈一覆、唯爾時寄下与魏君之書目、至今未到、此或係船便遲誤、想未必爲稅關所沒収也。近因年過八十、因留下胡鬚、表示老衰、照有相片、特附呈一紙、請賜留存、窃以爲稍有胡志明的意思、一笑、北京近日甚熱、時常超過一^{華氏}百度、但此亦是暑中常事、不是其今年特別的熱、惟亦幸時常有雨、得以解暑也。勿々不盡。

安藤更生先生 周作人「周作人所書」（朱文長方印） 七月六日

【写真の注意書き】

周作人八十一才の寫真在中／貴重なり

【写真裏】

一九六五年六月廿二日 知堂年八十一「周」「作」(朱文聯印) 安藤更生先生惠存

No.78 安藤→周 1965年7月24日

我儘なる御願早速お聴き届け下され見事なる御染筆を賜りありがたく御礼申上ます。只日本は梅雨中にて装潢には不向きな季節ですので梅雨あけ次第表具させるつもりでをります。本当にありがたう御座りました。このごろ書物の御注文がありませんがどうか御遠慮なくお申つけ下さい。ちかごろ自動車を買いましたので市中へ出るのは億劫でなく玉川にも夏が来て霖雨も間もなく霽れるでせう。来月は信州へミイラ調べにゆきます。早稲田大学もやっと私の十数年の主張が通り来年から中国文学科を設置する事になりました。松枝君に中心になって貰ひしっかりした学科に仕様と思っております。事務局乗派が多い事は戦中変わりません。幾分警戒して本物にしようと思っております。奈良と中国の随筆を書かうと思ひながらなかなか筆が進まずいらしてゐます。御身御大切に。

七月廿四日 夜 安藤更生

周啓明先生函丈

No.79 周→安藤 1965年8月7日



拜啓 得廿四日惠書、併賜下郵票、甚爲感謝。前回所寄書目、不知何故迄未到達、論道理決無没収の道理、想係途中遺失了。北京近來天氣尚不很熱、只是缺少雨、大有干旱的意思、平常七八月中總是下雨、是一年中雨量最多的時候、現在却並不這樣、也是很奇怪的事。頃聞谷崎君病故、深爲悼惜、年紀還沒有我這樣大。匆々不盡。

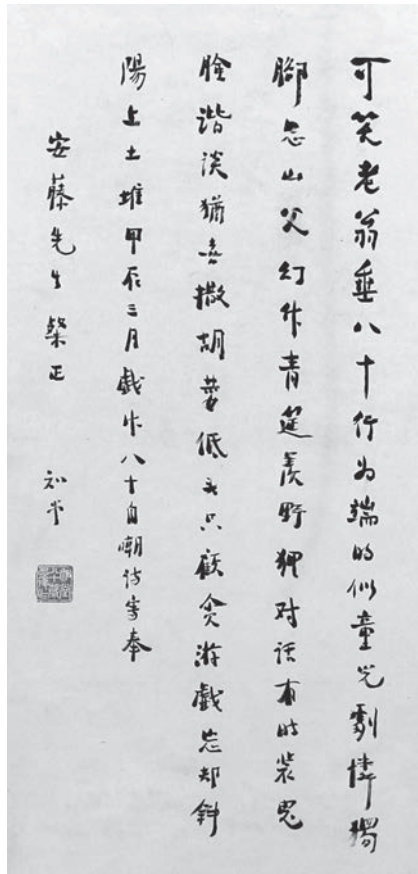
安藤更生先生 八月七日 周作人拜

注

- (1) 拙稿「周作人・安藤更生往来書簡(1)」(『早稲田大学會津八一記念博物館 研究紀要』第18号、2017年、35～48頁)、「周作人・安藤更生往来書簡(2)」(『早稲田大学會津八一記念博物館 研究紀要』第19号、2018年、91～110頁)
- (2) 周吉宜整理・陳力衛等訳「安藤更生与周作人往復書信」(『中国現代文学研究叢刊』2017年7期、178～215頁)
- (3) 実際には、1963年10月4日「鑑真和尚逝世一千二百周年記念大会」が開催され、安藤は日本文化代表団団長として招かれた。安藤は周との面会を条件として提示し、出席を決めたという。この訪中に同行した日本文化代表団のメンバーには、井上靖、宮川寅雄、長島健らがいた。旅程としては、9月29日に北京着、翌日は広濟寺にて趙樸初ら中国側と懇談。その後、記念大会に出席後、10月7日に周作人との再会を果たし、8日は魯迅博物館の見学。9日から西安にわたり名勝旧跡を参観、13日は南京に移動し、棲霞寺での「鑑真記念集会」にて挨拶、15日は揚州法浄寺平山堂にて催された「鑑真和尚逝世一千二百年記念慶讃会」に出席。杭州、広州を経て帰国している。
- (4) 前号に掲載した1962年11月8日の周書簡にて、魏廣洲(1912～2006)が東方文化研究所編『東方文化研究所漢籍分類目録』(東方文化研究所、1943年)の購入を依頼している。魏は西琉璃廠にて書店を営み、安藤が北京居住時に懇意にしていた人物。
- (5) 今村信雄『落語の世界』(青蛙房、1956年)
- (6) 安藤鶴雄『落語国・紳士録』(青蛙房、1959年)
- (7) 『現代教養文庫街道今昔368・369』上・下(社会思想研究会、1962年)
- (8) 上巻(『角川写真文庫 東海道五十三次 上』(角川書店、1957年))はあるものの、下巻については詳細不明。
- (9) 安藤更生「苦雨齋訪問記」(『大安』10-11、1964年)を指す。
- (10) この手紙には魏廣洲からの手紙が同封されているが、ここでは省略した。
- (11) 鄭子瑜(1916～)は、1964年から4月から翌年の1月末まで早稲田大学語学教育研究所の客員教授として在籍していた(『鄭子瑜墨縁録』作家出版社、1993年を参照)。文学研究科や語学教育研究所の授業を担当し、中国古典文学や中国修辭学などを講じた。
- (12) 松枝茂夫(1905～1995)は、佐賀県有田出身。東京帝国大学文学部支那文学科を卒業後、北京に1年余り留学。竹内好、武田泰淳、増田渉、飯塚朗らと中国文学研究会を結成。東京都立大学を定年退職した後に、早稲田大学教授を勤めた。古典文学では『紅樓夢』、現代文学では周作人に深く傾倒し、生涯その翻訳に全力を傾注した。松枝もまた周作人

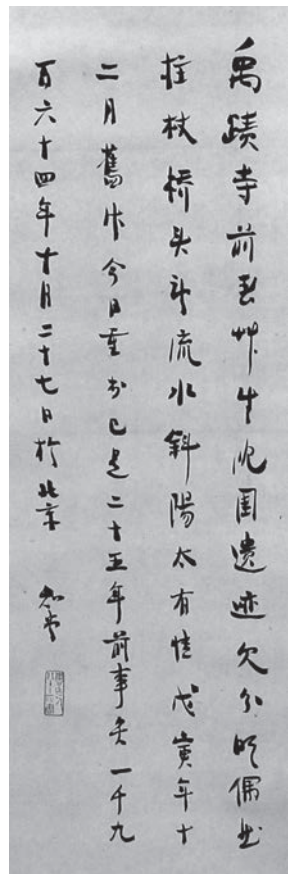
に私淑しており、交流が深かった。松枝茂夫宛の周作人書簡は、小川利康・止庵編『周作人致松枝茂夫手札』（広西師範大学出版社、2013年）にて、全通が掲載されている。なお2017年、ご親族のご厚意により、松枝茂夫宛ての周作人書簡と周作人の書作品を当館に御寄贈頂いた。

- (13) 静嘉堂文庫美術館は、東京都世田谷区岡本にある。岩崎彌之助（1851～1908）と岩崎小彌太（1879～1945）の父子二代によって設立された、東洋古美術品を多数収蔵する美術館。
- (14) 本書簡については本紀要18号の拙稿40頁にNo15（1961年3月）として配列したが、前掲の周氏、陳氏による論考中で、周作人の1965年2月8日の日記に合致する内容があることが指摘された。18号の筆者の記述を訂正し、この書簡を1965年のものに訂正したい。
- (15) 須田栄『千夜一夜』（青蛙房、1960年）。
- (16) この記事は、さねとうけいしゅう「谷崎潤一郎と中国」（『図書新聞』1965年、1月9日）を指す。
- (17) 葉恭綽「歴代藏經考畧」は胡適・蔡元培・王雲五『張菊生先生七十生日紀念論文集一冊』（商務印書館、1938年）に所収のものしか見当たらなかった。
- (18) 正しくは、朱謙之『老子校釋』（中華書局、1963年）。
- (19) 後に、羅福頤・王人聰著、安藤更生訳『中国の印章』（二玄社、1965年）として刊行。
- (20) 古川晴風（1919～2002）は、早稲田大学文学部卒、早稲田大学文学部教授。ギリシア・ラテン語学者。1972年から82年までは早稲田大学図書館長を勤め、90年に定年し、名誉教授となる。
- (21) この印は、当館に収蔵される安藤コレクションのうちのひとつ（AKY-417）。刻者の王介籙（1897～1988）は、名は賢、字は啓之。江蘇省海門の人。年少より詩文、書画、篆刻を好み、吳昌碩の門下となる。王一亭らと共に来日し、日本人画家と交流を持った。
- (22) この印もまた、安藤コレクションに含まれる（AKY-420）。来楚生（1903～1975）、名は稷、号は然犀。浙江蕭山の人。武昌に生まれる。詩、書、画、印をすべて善くした芸術家として知られる。
- (23) ここで言及されている周作人の書は、実際に安藤コレクションに含まれる。一つは「八十自寿詩」（1）、もうひとつはかつて鄭氏に頼まれて揮毫したという「苦茶庵打油詩其三」（2）である。この「八十自寿詩」については、松枝茂夫にも1964年12月に贈っている。（小川利康『叛徒と隠士 周作人の一九二〇年代』（2019年、平凡社）、小川利康「周作人・松枝茂夫 往来書簡 戦後篇」（『文化論集』第33号、2008年）を参照。）



【圖1】 八十自壽詩 63.8×31.7cm 軸 紙本墨書

可笑老翁垂八十 行為端的似童痴
 劇憐獨脚思山父 幻作青筵羨野狸
 對話有時裝思險 諧談猶喜撒胡荽
 低頭只顧貪遊戲 忘却斜陽上土堆
 甲辰三月戲作 八十自嘲詩寫奉
 安藤先生榮正 知堂
 「知堂八十歲以後作」(白文重槲方印)



【圖2】 苦茶庵打油詩其三 52.2×18.5cm 軸 紙本墨書
1964年10月27日

禹蹟寺前春草生 沈園遺迹欠分明
 偶然拄杖橋頭望 流水斜陽太有情
 戊寅年十二月舊作 今日重書已是二十五年前事矣
 一千九百六十四年十月二十七日 於北京 知堂
 「周作人八十所書」(朱文長方印)

〔周作人・安藤更生往来書簡リスト〕（*は今号に掲載した書簡）

No	執筆者	日付	概要	作品 ID	備考
1	安藤 1	1943年 3月22日	封書 便箋 10枚	墨書	追加 第19号掲載済み
2	安藤 2	1951年11月17日	封書 便箋 2枚	墨書	追加 第19号掲載済み
3	周 1	1952年 9月21日	封書 便箋 2枚	墨書	161 第18号掲載済み
4	周 2	1954年 4月13日	封書 便箋 1枚	墨書	184 第18号掲載済み
5	周 3	1960年10月 6日	封書 便箋 2枚	墨書	195 第18号掲載済み
6	安藤 3	1960年10月19日	封書 便箋 6枚	墨書	2 第18号掲載済み
7	周 4	1960年11月19日	封書 便箋 2枚	墨書	182 第18号掲載済み
8	安藤 4	1960年12月 1日	封書 便箋 4枚	墨書	3 第18号掲載済み
9	周 5	1961年 1月 2日	封書 便箋 1枚	墨書	198 第18号掲載済み
10	安藤 5	1961年 1月17日	封書 便箋 2枚	ペン書き	4 第18号掲載済み
11	周 6	1961年 1月17日	封書 便箋 1枚	墨書	197 第18号掲載済み
12	周 7	1961年 2月 4日	封書 便箋 2枚	墨書	196 第18号掲載済み
13	安藤 6	1961年 2月 6日	封書 便箋 3枚	墨書	5 第18号掲載済み
14	安藤 7	1961年 2月12日	封書 便箋 1枚	ペン書き	6 第18号掲載済み
15	周 8	1961年 3月 9日	封書 便箋 2枚	墨書	207 第18号掲載済み
16	安藤 8	1961年 3月20日	封書 便箋 4枚	ペン書き	7 第18号掲載済み
17	周 9	1961年 4月19日	封書 便箋 1枚	墨書	202 第18号掲載済み
18	安藤 9	1961年 4月27日	封書 便箋 2枚	ペン書き	追加 第19号掲載済み
19	安藤 10	1961年 5月10日	封書欠便箋 1枚	ペン書き	追加 第19号掲載済み
20	周 10	1961年 5月11日	封書 便箋 2枚	墨書	201 第18号掲載済み
21	安藤 11	1961年 6月 5日	封書 便箋 2枚	ペン書き	8 第18号掲載済み
22	周 11	1961年 7月 1日	封書 便箋 1枚	墨書	190 第18号掲載済み
23	周 12	1961年 7月 8日	封書 便箋 2枚	墨書	200 第18号掲載済み
24	安藤 12	1961年 8月 3日	封書 便箋 3枚	墨書	追加 第19号掲載済み
25	周 13	1961年 8月30日	封書 便箋 1枚	墨書	194 第18号掲載済み
26	周 14	1961年 9月29日	封書 便箋 1枚	墨書	188 第18号掲載済み
27	安藤 13	1961年10月 8日	封書 便箋 2枚	ペン書き	9 第18号掲載済み
28	周 15	1961年11月 6日	封書 便箋 1枚	墨書	205 第18号掲載済み
29	周 16	1961年11月10日	封書 便箋 1枚	墨書	199 第18号掲載済み
30	安藤 14	1961年12月 3日	封書 便箋 4枚	墨書	追加 第19号掲載済み
31	周 17	1961年12月14日	封書 便箋 1枚	墨書	165 第18号掲載済み
32	安藤 15	1961年12月16日	封書 便箋 3枚	墨書	追加 第19号掲載済み
33	周 18	1961年12月27日付	封書 便箋	墨書	168 第18号掲載済み
34	安藤 16	1962年 1月 1日	封書 便箋 3枚	ペン書き	追加 第19号掲載済み
35	周 19	1962年 1月20日	封書 便箋 1枚	墨書	192 第19号掲載済み
36	周 20	1962年 2月 8日	封書 便箋 1枚	墨書	204 第19号掲載済み
37	安藤 17	1962年 3月19日	封書 便箋 1枚	ペン書き	1 第18号掲載済み
38	周 21	1962年 4月16日	封書 便箋 4枚	墨書	172 第19号掲載済み
39	周 22	1962年 4月22日	封書 便箋 1枚	墨書	191 第19号掲載済み
40	安藤 18	1962年 4月28日	封書 巻紙	墨書	10 第19号掲載済み

周作人・安藤更生往来書簡(3)

No	執筆者	日付	概要		作品 ID	備考
41	安藤 19	1962年 4月30日	封書 便箋 3枚	墨書	11	第 19号掲載済み
42	周 23	1962年 5月23日	封書 便箋 2枚	墨書	193	第 19号掲載済み
43	周 24	1962年 7月13日	封書 便箋 1枚	墨書	175	第 19号掲載済み
44	安藤 20	1962年 8月13日	封書 便箋 3枚	ペン書き	13	第 19号掲載済み
45	周 25	1962年 9月20日	封書 便箋 1枚	墨書	186	第 19号掲載済み
46	周 26	1962年10月30日	封書 便箋 1枚	墨書	167	第 19号掲載済み
47	周 27	1962年11月 8日	封書 便箋 1枚	墨書	187	第 19号掲載済み
48	安藤 21	1962年11月18日	葉書	ペン書き	14	第 19号掲載済み
49	周 28	1963年 5月 6日	封書 便箋 1枚	墨書	169	第 19号掲載済み
50	安藤 22	1963年 6月 2日	封書欠 便箋 2枚	ペン書き	15	第 19号掲載済み
51	周 29	1963年 6月19日	封書 便箋 2枚	墨書	160	第 19号掲載済み
52	周 30	1963年 6月30日	封書 便箋 1枚	墨書	164	第 19号掲載済み
53	安藤 23	1963年 7月 2日	封書 便箋 1枚	ペン書き	16	*
54	安藤 24	1963年 7月25日	封書 便箋 2枚	ペン書き	17	*
55	周 31	1963年 7月27日	封書 便箋 3枚	墨書	177	*
56	周 32	1963年 8月10日	封書 便箋 2枚	墨書	178	*
57	周 33	1963年 8月17日	封書 便箋 1枚	墨書	183	*
58	安藤 25	1963年 9月11日	封書 便箋 3枚	墨書	18	*
59	周 34	1963年10月21日	封書 便箋 3枚	墨書	171	*
60	安藤 26	1964年 1月 1日	葉書(賀状)	ペン書き	19	*
61	周 35	1964年 1月24日	封書 便箋 1枚	墨書	166	*
62	安藤 27	1964年 2月15日	封書 便箋 1枚	ペン書き	20	*
63	周 36	1964年 3月 9日	封書 便箋 1枚	墨書	206	*
64	安藤 28	1964年 3月17日	封書 便箋 1枚	ペン書き	21	*
65	周 37	1964年 3月23日	封書 便箋 2枚	墨書	181	*
66	周 38	1964年 8月 9日付	封書 便箋 1枚	墨書	170	*
67	周 39	1964年10月25日	封書 便箋 1枚	墨書	173	*
68	安藤 29	1964年11月 7日	封書 便箋 2枚	ペン書き	22	*
69	周 40	1965年月日不明	封書 便箋 1枚	墨書	162	*
70	周 41	1965年 1月 2日	封書 便箋 2枚	墨書	189	*
71	安藤 30	1965年 1月 9日	封書 便箋 1枚	ペン書き	23	*
72	周 42	1965年 2月 6日	封書 便箋 1枚	墨書	174	*
73	周 43	1965年 4月30日	封書 便箋 1枚	墨書	163	*
74	安藤 31	1965年 5月25日	封書 便箋 2枚	ペン書き	追加	*
75	周 44	1965年 6月 6日	封書 便箋 3枚	墨書	179	*
76	周 45	1965年 6月 7日	封書 便箋 1枚	墨書	185	*
77	周 46	1965年 7月 6日	封書 便箋 1枚	墨書	203	*
78	安藤 32	1965年 7月24日	封書 便箋 4枚	墨書	追加	*
79	周 47	1965年 8月 7日	封書 便箋 1枚	墨書	180	*
80	安藤 33	1961年 8月17日	封書のみ 中身なし		12	

